The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	<図書紹介>藤田治彦監修『ウィリアム・モリスとアーツ&クラフツ』
Author(s)	渡邊, 眞
Citation	デザイン理論. 2004, 45, p. 96-97
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53184
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

藤田治彦監修
『ウィリアム・モリスとアーツ＆クラフツ』
「ウィリアム・モリスとアーツ＆クラフツ」展実行委員会，2004

渡邊　眞／京都市立芸術大学

本書は，大丸ミュージアム梅田で開催された「ウィリアム・モリスとアーツ＆クラフツ」展（2004年9月15日－10月13日）を記念して出版されたもので，カタログ的な意味を持ち出品作品の写真図版も魅力的であるが，多才な執筆者を擁して，アーツ・アンド・クラフツ運動を幅広く捉えようとした意欲的な試みでもある。

意匠学会の会員としては，藤田治彦会員が監修と「アーツ・アンド・クラフツ運動とは何か」，「アート・ワーカーズ・ギルドとアーツ・アンド・クラフツ展覧会協会」，「ウィリアム・モリスと古建築物保護運動」を担当し，藪亨会員が「センチュリー・ギルドの先駆的総合活動」，吉村典子会員が「モリスとド・モーガンの「理想の工房」：マートン・アビーの工房群」，今井美樹会員が「ケルムスコット・プレスとプライヴェート・プレス運動」，菅靖子会員が「セントラル・スクール・オブ・アーツ・アンド・クラフツ」，平光睦子会員が「ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動関連主要人名」を担当している。

会員以外のテーマも列挙しておくと，ウィリアム・モリス・ギャラリーのピーター・コーマックによる「ウィリアム・モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動」がモリスと運動の概要を伝え，運動の各側面を扱った「ジョン・ラスキンとセント・ジョージのギルド」，「C・R・アシュビーとギルド・オブ・ハンディクラフト」，「『ステューディオ』誌とアーツ・アンド・クラフツ運動」，さらに「ウィリアム・モリスとイギリスの社会主義」といったモリスの社会主義運動をテーマにしたものや，「ウィリアム・モリスと21世紀の世界」と題したモリスの今日的意義を問うもの，「日本に生きる草の根のアーツ・アンド・クラフツ」という今日の日本における実践を報告したものなど多彩な論述が並んでいる。

全体的な印象を言えば，各論文のページ数に限りがあったようで，少し論及に物足りなさがあったが，適切な人選もあって，簡潔で専門的なまとまりを示している。会員の論文に限って，その内容を少し紹介しておきたい。

藤田会員の「アーツ・アンド・クラフツ運動とは何か」で強調されたのは，

> それは，字義通りに取るならば「複数形の美術と工芸」の運動ということになるが，実際にはあらゆる造形芸術どころか，人間の生の営みを社会全体あるいは環境全体との関係においてとらえようとした，現在の環境保護運動などとも結びつく壮大なデザインの運動であり，地域福祉と表裏一体をなす社会運動でもあった。

という広範な運動性である。

また「アート・ワーカーズ・ギルドとアーツ・アンド・クフツ展覧会協会」では，アート・ワーカーズ・ギルド設立の機縁となったアーティストのグループである「ザ・フィフティーン」と建築家を中心としたグループ「セント・ジョージ芸術協会」の活動から，ギルドの結成を追い，モリスとの関係の微妙さを指摘する。興味深いのは，「アート・ワーカーズ・ギルドはいわばロンドンのクラブの一つであった。」という性格の指摘で，そのためもあってか，今日まで存続し，活動を続けているということである。

藪会員の「センチュリー・ギルドの先駆的総合活動」では，センチュリー・ギルドの活動を，ヘンリー・コールが企てた事業「フェリックス・サマリー美術製品」の流れを汲むものと位置付け，モリスの社会主義的運動の系譜というより「……むしろ唯美主義の流れに組みする」と特徴づけ，自分たちの工房での製作だけでなく，他の製作会社や販売会社にデザインを積極的に提供する姿勢に注目している。文芸作品を多く掲載した機関誌『ホビー・ホース』の発行など，特異な側面，活動の幅広さが指摘されているが，1888年という早い時期での解散の理由が，運営記録が残っていないこともあって，十分解明できない点を問題としている。

吉村会員の「モリスとド・モーガンの「理想の工房」：マートン・アビーの工房群」では，モリスと製陶業者のド・モーガンの交流とマートン・アビーにそれぞれの「理想の工房」を並設する動き，工房の活動の様子が詳述されている。マートン・アビー自体美しい場所であり，理想の工房の地に相応しいところのようであったが，モリスが，そこに完全に居を移さず，やはり活動の中心をロンドンに置いていたという著者の指摘は，モリスの一面を語るものとして興味深い。

今井会員の「ケルムスコット・プレスとプライヴェート・プレス運動」では，エマリー・ウォーカーの講演を刺激とするケルムスコット・プレス設立の経緯にはじまり，モリスが紙を選定し，活字を創作し，レイアウトやオーナメントに創意工夫を凝らした様子を伝え，さらに「……装丁に関しては余り関心が払われなかった。」という意外な事実が指摘されている。勿論，印刷された本のことや，プライヴェート・プレス運動への影響についてもまとまりよく論述されている。

菅会員の「セントラル・スクール・オブ・アーツ・アンド・クラフツ」では，「モリスとアーツ・アンド・クラフツ運動の理念が行政レベルに組み込まれた」動きとしてのセントラル・スクール・オブ・アーツ・アンド・クラフツの開設を主題とし，設立に尽力し，初代校長となったウィリアム・レサビーの活躍と，セントラル・スクールの草創期の様子，エドワード・ジョンストンの起用によるタイポグラフィーの開花と伝統の形成が語られている。

最後に造形以外の領域におけるモリスの活動の一つである古建築物保護運動について，藤田会員が，モリスによる古建築物保護協会の創設の経緯，活動内容を伝え，さらに今日の活動様相も詳述されている。古建築物保護協会が，ジョージアン建築以前の歴史的建造物を対象とする保護活動団体として今日に至り，それに対して，ジョージアン・グループ，ヴィクトリアン協会，20世紀協会など別の時代を対象にする団体が生まれ，それらが協力しあってイギリスの歴史的建造物を保護しようとする様子は，興味深く，うらやましい。

以上，会員の論文についてのみ紹介したが，最後に図版の面では，モリスやモリス商会以外の作品も多く，アーツ・アンド・クラフツ運動を幅広く捉える手がかりを与えてくれるものとなっている。